

不登校・登校拒否・高校中退

学校とは？教師とは？保護者とは？

「教育条理」で考えよう

卜部 喜雄

はじめに

2010年「北海道の教育」（合同教育研究全道集会実行委員会編）の本分科会報告で共同研究者の田中敦氏（北星学園大学）は、本分科会へのレポート発表、現職教職員の参加者が少なくなり、急遽共同研究者がレポートを準備し、難局を乗り切ったことにたいして、「何か腑に落ちない。それは私たちに密かに忍び寄っていく管理と競争、そしてあなたも人間を一つの物差しによって測定し値打ちを決めていく成果主義への憤りをじかに感じ取ることができるところではなからうか」と述べ、「自由にも言えぬ職場の空気がギスギスした雰囲気は教職員をはじめ人間の心をますます内面へと封じ込めていくことにほかならない」と警鐘

を鳴らしている。

今年の本分科会は、参加者は数字の上では多くなったが、教職員の参加者や報告は少なかった。参加者は、北大、教育大、文教大などの大学生が多く、若者の率直な疑問、意見で議論は活発であった。

今回のレポートは5本で、高教組養護教員部の「子どもの実態調査」、全国に先駆けて札幌市に「政策提言」を行なった「不登校の子どもたちの育ち・学びを支える札幌連絡会」の報告が目された。

## 一 基調報告

共同研究者の卜部喜雄氏（北海道高等学校教職員センター付属教育研究所・相談所事務局長）が、本分科会の変遷と役割、課題について基調報告を行なった。

(一) 役割について

- ① 不登校・登校拒否の子どもと保護者の悩みを話し合う。
  - ② 高校中退は「なぜ」を考える。
  - ③ 地域の「支援団体」等の交流。
  - ④ 明日への活力を自分のものにする。
- (二) 最近の討論の特徴
- ① 地域の組織が、公的支援に道を開き、学校を開設。

②不登校・登校拒否は「いつでも誰にも起こりうる」から、原因探してではなく、ありのまま受け入れること。

③学校への「復帰」が「解決」なのか。

④「不登校はカナリヤ」を基本に学校・学級づくりをする。

### (三) 課題

①学校・学級づくりを「教育条理」から進める。

②学校と地域の連携を深める。

③実数は多いが高校中退の報告は少ない。

④教育基本法改定後の変化をつかむ。

## 二 報告書の概要

### 1 「子どもたちに寄り添って」

—学級通信でつながる有朋高校での取り組み—

道高教組有朋高校分会 山本 政俊

報告者は、参加できずレポートのみである。

山本氏は、「私は三人の子を持つ父親です。不登校もいじめの被害者も非行も経験し、眠れない夜を過ごし、仕事に忙しいのを理由に子育てを妻にまかせてばかりのダメ親父ではありました」。ある日、妻が言った言葉にハッとしました。その言葉は、「お父さん、子どもは親に迷惑をかけるために生まれてくるんだよ」。その後、二〇一〇年、十勝から

札幌の有朋高校に転動し、「単位制」の教員になった。

有朋高校は、昭和四十二年北海道唯一の通信制高等学校として独立。現在は、レポート提出・スクーリング中心の通信制と普通に授業を行う単位制の高校である。

二年生の担任になった山本氏は、個人調査書を読んで涙がこぼれたと言う。在籍している生徒の四割は中学校までの不登校経験者で、その経験は子どもの耐えられる限度を超えていた。

この高校では、SHRを設定していても、生徒の講座選択がいろいろで全員揃うことはほとんどない。山本氏は、担任として週一回しか会うことができないので、「以前からやっていたことですが、毎日学級通信を出します。SHRで配布しますから、顔を見せてくれるとうれしいな」と宣言して実行。山本氏は、

①生徒同志、担任と生徒との信頼関係ができる。

②「学校のことがよくわかる」と保護者が喜んでいる。

③生徒といることが楽しくなり、生徒にやさしくなる。

④職員室の同僚と会話が增える。

⑤生徒たちの成長の記録であり、自信と友人は一生の財産になる。

と分析している。

集団嫌い、人間関係がうまくできない生徒が増える昨今、

教師の工夫と努力も必要である。

## 2 保健室からの発信

### —子どもの実態調査報告— 道高教組養護教員部常任委員会

二〇〇九年一月、道高教組養護教員部は、道立学校（高校・特別支援学校）の養護教諭にアンケートを実施した。約四〇〇の発送で、五十八の回答を得て、内容を分析、発表した。

高教組余市紅志分会の本間康子氏が分科会で報告した。「子どもの状況が見えない」という声が養護教諭の集まりでも多くなったと言う。養護教諭の勤務実態も含めた調査結果は、教育界の現状を告発している。

#### (1) 調査結果の概略

##### ① 性に関するトラブル

四十九の回答のうち、在学中または退学後すぐ出産十五件、売春・性犯罪関与、被害は二十八件。男女交際で二人になると、男性が性交ばかり強要してくる、社会人とかからだの関係で金銭をもらおう、避妊しない性交で不安、女性に梅毒をうつされたなど、相談を受ける養護教諭の手に余る事例が多い。

子どもの内面の成長を無視して、商品化された性情報が簡単に手に入り、子どもたちが商品として取り込まれている。養護教諭の指導が届かないので困惑も大きいと言う。

##### ② 発達障害と思われる生徒

四十五の回答で、対人関係、集団生活不適応が二十六件。学習の遅れ八件、アスペルガー症候群など保健室対応十五件。

漢字がほとんど読めない、書けない生徒。休み時間毎回保健室に来る生徒は、いじめで教室にいられない、弁当も職員室の入り口で食べる。

これらの生徒に関して、養護教諭は、「教職員や保護者の無理解」、「早い対応ができず、子どもの将来が心配」と述べている。

##### ③ 精神疾患に関すること

四十四の回答のうち、通学しながら通院している事例二十五件、学校で相談・援助した事例十七件、退学・転学など七件。リストカットなど不安を自傷で紛らしていた生徒に精神科の受診を勧め、通院しながら卒業。死にたいと言い、うつ傾向の生徒に医者、担任、養護教諭の連携で、通院のため欠課を三割まで認めさせた。学校医からパニック障害と言われ、診療内科を受診、

統語失調症と診断された事例は親の理解に時間がかかった。

(2) 生徒の健康状態で気になること

①歯の放置が目立つ。歯を磨いてはいるが、丁寧ではない。

②必要以上に肥満を気にしている

③朝抜きで空腹時にジュースなどをがぶ飲み。ビタミン不足も多い。

④携帯電話を離せない。生身の人間として交流不足。

⑤マンガ、ゲームに夢中で、架空の世界に入っている。

⑥頭痛、腹痛、筋肉痛などにすぐ薬をほしがる。

(3) 調査から見えること

五十八件の回答で二百三十一件の記述回答があった。

養護教諭は、子どもたちの問題の発見者であり、荒波からの防波堤の役割があるが、学校に在籍している間の関係である。子どもの訴えは、家族や友人、地域の問題を含む。学校が福祉、医療、労働関係機関との密接な関係をつくることが求められている。

3 「学校って何？教師って何？親って何？」その四

北海道高等学校教職員センター

付属教育研究所・相談所 卜部 喜雄

高校センター教育研究所・相談所の相談員をしている卜部喜雄氏は、四年連続この分科会に報告書を出している。今回は、高校に焦点をあて、「進学校」と「低学力校」の相談を紹介し、高校の教える内容について言及している。また、最近の教職員の病気休職のうち、約七割が精神疾患であることの異常さとその元凶について考察している。

(1) 子どもたちは悩む

①進学校や「特進」コース

ある父親の相談。私学の「特進」コースに入学した娘は、五月の連休明けから学校を休みがち。部活（吹奏楽）でも、「二人置いておかれる」ように感じ、土日は宿題も多く学校に行けなくなった。

他の学校の母親は、中学時代は学年トップの成績だったが、進学校では同学年に三〇〇人もいるので、最近の英数国の学力テストで二百番位になった。親の期待もあり、娘に当たってしまう。相談員が、「成績の順位にこだわらず、子どもを信頼し、愛していること

を伝え、見守ってあげてください」と言うのと、母は肩の力が抜けたらしく「電話して良かった」と述べた。

ここには、進学中心の高校の課題が見える。

## ② ほおっておかれた生徒たち

高校の英語講師の話。閉校になる予定の高校は、定員割れで希望すれば入学できるらしい。アルファベツトも危ない生徒、自分の名前を漢字でやつと書ける生徒もいる。試験は零点か一桁。「英語は一生嫌い」という女生徒がいる。おしゃべりとマンガを書くことは大好き。教師・大人不信の高校生は、授業は「面倒くさい」とやる気を見せない。でも、学校には来る。理由は、友達に会いたいから、できれば「らくして卒業したい」と言う。これまで、学校で、「ほおっておかれた」ことがよくわかる。その先生は、生徒の実態から、練習で達成感、内容のある教材で「やる気」を引き出している。キング牧師の演説、広島・長崎の原爆、「サウンドオブミュージック」などが生徒の心を打つたようだ。

## (2) 大学生が高校時代を語る

報告者は酪農大学で非常勤講師をしている。

大学二年生の感想がおもしろい。

憲法と教育基本法の学習をした後の感想。

① 日本国民は、もつと憲法を理解する必要がある。高校時代は受験のための知識だった。

② 教育基本法の改定で、知らないうちに、日本の教育は「国民のもの」から「国家のもの」になった。

③ 進学校では、毎日勉強ばかりと聞いてショックだった。私は、豚や牛の世話で生き物に触れ、資格も取れて農業高校で良かった。

④ 農業科の授業内容、時間割に驚いた。卒業論文や発表会もあり、座学ばかりの自分には、うらやましく思えた。あらためて、「学校って何？」が問われている。

(四) 教職員は今、病休は自己責任？

道教委によると平成十九年(二〇〇七年)の教職員の長期休職者は三三四人で、その六十八％は精神疾患によるものという。平成十二年度は四十二％であったから、その比率の増大は著しい。教育基本法改定後、副校長、指導教諭等の役職が導入され、情報提供制度、職員会議の諮問機関が定着するなかで、職場の話し合いが少なくなっている。ベテラン教諭も悩みを「自己責任」で解決しなければならなくなつた。一人一人の努力には限界もあり、教職員は「精

神疾患の入口」に立っていると指摘している。

#### 4 「自分を知る時間」を保障する生徒支援

童夢学習センター・藤女子大学 実平 奈美

共同研究者の実平奈美氏は、「学校に行けない状態」な  
った二名のケースを紹介し、保護者と教師の対応について  
報告。

「勉強しなければ良い大学に行けない」思いはA君を学  
年途中で長期休学に追い込んでいた。また、クラスの男子  
がうるさく幼児的のため苦痛を感じていたB子は学校に行  
けなくなつた。どちらのケースも、教師の過剰な登校刺激  
を無くし、生徒たちのペースに合わせた対応が功を奏した  
という。

思春期の生徒たちにとって、「自己確立」は重要な課題  
であり、「自主的に決める」ことを保障し、援助すること  
がポイントという。不登校は苦しい経験であるが、精神的  
に成長する機会ともなりうる。安心して不登校できる時間  
とその中で自律的に行動を選択できる機会を与えることが  
大切と提言している。

#### 5 「不登校の子どもの育ち・学びを支援、最善の環 境を整備する政策を実現するための提言書」の説明

NPO法人札幌自由が丘学園 亀貝 一義

本分科会にいつも貴重な提言をする亀貝一義氏は、全国  
に先駆けて札幌市に「政策提言」を行なつた。その意義と  
概略を説明した。

札幌市は二年前、「子どもの最善の利益を実現するため  
の権利条約」を制定した。これまでも文部科学省、道教委、  
札幌市教委は、「不登校対策」の施策を行なってきたが、  
その基本は不登校児童・生徒の「学校復帰」であつた。こ  
の二十年間、これが成功していないことを指摘し、この「政  
策提言」の具体化を要望した。

「提言」の基本は十一項目。

- ① 認定フリースクール制度の制定
- ② 札幌市不登校対策検討会議の改革
- ③ 教育センターとフリースクールとの定例検討会の開催
- ④ 不登校相談会の開催
- ⑤ フリースクール見学会の開催
- ⑥ スクールカウンセラーの派遣
- ⑦ 教科書支給
- ⑧ 市民活動団体との連携促進

- ⑨ 社会体験機会の創出
  - ⑩ フリースクール経営者養成講座の開催
  - ⑪ 廃校舎の利用制度の制定
- これらの内容を詳細に説明する紙数はないが、今後の札幌市の動きが注目される。

### 三 討論の中から

それぞれの報告書は、学生たちに耳慣れない文言もあり、率直な質問・疑問が出され、共同研究者・司会者が丁寧に「解説」する場面もあった。特徴を紹介する。

- ① 不登校の子どもたちは、「社会人」になれるのだろうか。  
… 不登校を経験したから即「引きこもり」にはならない。社会人として活躍している例が多い。
- ② わが子が不登校になった経験の親もいるが、どんな気持ち、どう対応したのか。  
… 子どもが不登校になると、親は「出口の見えない暗闇に入った」感じです。でも、子どもを信じて「安心できる居場所」を保障した。昼夜逆転の生活が続くが見守るしかない。出口はあります。
- ③ 「学力」が付かないのではないか  
… 確かに、学校で言う「学力」はありません。好き

な分野から、必要な「学力」ついていきます。

- ④ 「不登校はカナリア」とはどういうこと

… 昔、炭鉱では、ガスを検知するために先頭にカナリアを入れた鳥かご持って行った。ガスがあれば、鳥が騒ぐか死ぬ。学校に不登校があれば、そこに「ガス」があることを考える必要があるということ。

- ⑤ なぜ、先生方や当事者、親がここに来ないのか

… 本当はここで悩みを話すと良いのですが、教員は学校復帰を優先する傾向があり、議論がかみ合わないことがある。親はプレッシャーで来れないし、本人は外に出られない。教師も親も、「非難される」心配が、足を鈍らせているようです。

それにしても、教職員の報告や参加が少ないのは考えなければならぬ。